

国際経済と北海道経済と

商学部 教授 遠藤正寛
えんどうまさひろ

本年春学期の火曜日、私は1時限目に国際経済の授業を英語で、2時限目に北海道経済の授業を日本語で担当している。経済学系の科目という点では同じであるが、英語と日本語、国際経済と国内地域経済と、授業の内容はずいぶん異なる。休み時間での頭の切り替えには毎週難儀している。なぜこのようなことになったのか。それは、義塾大学院で国際経済学を専攻していた私が、最初の職を北海道の大学に得たことに始まる。

1996年4月、小樽商科大学に奉職した私は、すぐに北海道に魅了された。あるテレビ番組に触発され、道内212市町村（当時）を全て回ったりもした。ただ同時に、北海道拓殖銀行の破綻や農村地域からの人口の流出など、経済や社会についての暗い話題も見聞きした。北海道の全体像を理解したいと思いつつ、小樽での3年間はそれには短すぎた。それから、研究が始まった。

国際経済学の研究対象は、国境を越える経済取引である。私は外国との取引が日本国内の生産者や消費者に及ぼす影響を分析してきたが、国内の一地域への影響については満足できる分析を進められなかった。国際経済と北海道経済の研究も授業も、分離したままであった。

しかし、ようやく両者がリンクしてきた。この数年、私は日本の雇用・賃金が輸入でどのように変化したかを推計し発表してきた。この研究は、因果関係の分析手法の開発が進み、政府統計調査の詳細な調査票情報が利用できるようになったことで可能になった。今では、国際取引が道内に及ぼす影響も、地域や産業や企業の特徴、そして労働者の違いを考慮しつつ、詳細に観察できる。

四半世紀を過ぎて、国際経済の研究と北海道経済の研究が、ようやく私の中で一つになった。今は、外国との取引で北海道がより豊かになる方策を求めている。世界経済の成長センターである東アジア・東南アジアと離れていることは不利なのか。農林水産業者は輸出機会を活用できているのか。北海道経済と国際経済を一つの授業で、英語と日本語両方で扱う日は近い。



小樽商科大学にはゼミ合宿でも訪問しました
(2015年9月)



在外研究先のイェール大学で language partner
と (2005年7月)

談話室

教員によるエッセイコーナー